

土門剛



土門剛 どもん たけし

【プロフィール】

1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆している。主な著書に、「農協が倒産する日」（東洋経済新報社）、「穀物メジャー」（共著／家の光協会）、「東京をどうする、日本をどうする」（通産省八幡和男氏と共著／講談社）、「新食糧法で日本のお米はこう変わる」（東洋経済新報社）などがある。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。会員制のFAX情報誌も発行している。

〈上〉2月8日

マーケットが注目するのは、ただ一点。食味がよいかどうかである。従来コシと同等かそれを上回る食味でなければ、マーケットは受け入れられない。

食味に残る不安

15000円落ちのもの

筆者がコシBLを初めて試食したのは2月初め。コメ生産者が1000人ほど集まった新潟での講演会でのこと。主催者が用意してくれたコシBLのお握りを食味比較のつもりで食べてみた。口にしての感想は、ややあっさり系、どちらかと言えば「ひとめぼれ」に近いような印象を受けた。何よりも粘りがコシに比べて足りないと感じる。

そのことを新潟県農産園芸課の渡辺信夫課長に指摘してみたら、「食味は従来コシと遜色ありません。消費地での食味比較のアンケート調査でもそのような結果が出ております」との公式見解が戻ってきた。

アンケート調査は、昨年2回実施しているとのこと。1回目は東京、大阪、名古屋の16戸（53人）を対象にしたもの。2回目は東京の銀座と渋谷で実施した数百人規模の食味比

土門剛の

切抜帳

1 農業団体に遠慮？ 食糧自給率に新指標

2月10日付け日本経済新聞は、農業政策の中期的な指針を示す「食料・農業・農村基本計画」の骨子案を紹介。食糧自給率に農作物の金額を反映した新指標を加えるほか、ばらまきとの批判が強い補助金を重点化したり、株式会社の農業参入を進めたりする、の三つがポイント。3月に計画を正式決定すると前打ちしてきた。

自給率の見直しは、政治におよび腰の官僚が思い付く発想だ。政治や農業団体から自給率向上を約束させられ、それを実現するために補助金をばらまかされてきた。それを改めるためには、低い数字をかさ上げすればよいと役人が考え付いたようだ。

そこで「新しい食糧自給率の指標は国内農家の出荷額などから算出する」という方法を編み出した。これだと従来の算出法に比べ数字がグリーンと上昇。政治や農業団体の圧力をかわせると判断したようだ。

同紙は「野菜や果樹の生産量が反映されやすく、付加価値の高い有機農作物の生産を後押しできる」と農水官僚の言い分をそのまま紹介している。

そもそも食糧自給率とは何ぞやということを考えてみるべきだ。食糧を他国に頼らないということは独立国として対面を保つ最低限のことと国民の合意を得てきたはずではなかったか。そのために自給率向上を農業政策の今回に据えてきたはず。それを逆手に取って政治や農業団体が補助金ばらまきの口実に使ったのはとんでもない話だが、その政治や農業団体に遠慮して算出方法を変えてくるのはうなずけないことだ。

新潟県と全農新潟県本部による、従来のコシヒカリから新品種「コシBLヒカリ」への切り替え大作戦。「新潟コシヒカリ」の表示があれば消費者は黙って買ってくれる——そんなおこりから出た無謀な挑戦としか思えない。この秋には、マーケットからキツクイしつべ返しを受けるに違いない。

まずは、新潟日報の連載記事「変わる県産コシ／ブランド磨く新品種」から、切り替え大作戦の顛末を頭に入れてもらいたい。

〔新潟〕県産コシヒカリが、二〇〇

五年産から新品種「コシヒカリBL」に切り替わる。従来コシにいち病に強い性質を備えさせたコシBLは、「食味や収量などは従来コシと変わらない」ことから、表示は従来通りの「コシヒカリ」。減農薬が見込める上、DNA鑑定により本県産か他県産か判別も可能だ。県は新品種の導入で、「新潟産コシヒカリ」のブランドに一層の磨きをかけようと思気込む。一方、生産現場では、従来コシの事実上の切り捨てを不安視する声も広がっている」（連載

無謀！新潟県コシBL全面切り替え強行

較のアンケート調査だ。

渡辺課長はこう説明している。

「1回目調査で、新潟産の従来コシに比べコシBLが『おいしい』と答えたのは53人のうち22人。『従来コシと同じ』が19人、『従来コシがおいしい』12人でした。2回目のアンケート調査でも、コシBLが『おいしい』と答えたのは398人。『変わらない』117人、『おいしくない』309人でした。これらの結果で、コシBLは従来コシと食味の点で何ら遜色ないと、消費者から判断されたものと受け止めました」

その渡辺課長に「その調査は誰が実施したのか」といやみな質問を放つと、「県と全農県本部」と答えてきた。そこで、「あくまでコシBLへの一斉切り替えを強行したい当事者が調査主体となり、しかも調査対象を選ぶようなアンケートでは客観性や正確さはないよ。こんな手前味噌な結果でマーケットを納得させられると思うていたら大変なことになりますぞ」と忠告したら、急に黙りこくってしまわれた。すでに切り替え大作戦に踏み切っている県や全農県本部には馬の耳に念仏か。

草の根レベルでのコシBLの食味比較調査についても紹介しておこう。1月下旬、新潟市内のホテルでコメ関係者を集めた会合があった。そ

の席で県内某卸がコシBLの試食会をセットした。用意されたのはコシBL、従来コシ、市場にはまだ出回ってはいない花キラリの3品種。

同一条件で炊飯し、ブライントテストをしたところ、県内のコメ生産者や消費地のコメ販売業者など20人が選んだのは、1位従来コシ、2位花キラリ、3位コシBLの順。筆者と同じような評価だった。

ただし、読者にバイアスをかけないため、これとは逆の食味結果も紹介しておこう。

先の新潟日報の連載記事の(下)(2月10日)に、新発田市の(株)共生の大地にいがた二十一(井浦亮一社長)が昨年11月に企画した食味会のこと記されている。食生活改善普及会(新潟市)の主婦ら50人に従来コシと食味比較してもらい、井浦社長が「どちらがおいしかったか」と尋ねると、約40人がコシBL、2人が従来コシ、8人が「どちらもおいしい」と答えたと言う。

県や全農県本部が泣いて喜ぶ結果だが、筆者なりの解釈を加えておこう——同社と同会は、共に「有機」や「安全」で連なっていて、県の「BLコシはいもちに強く安全な米」との宣伝文句に引きずられたのではないか。

何はともあれ、食味会に参加した同社の生産者たちが「これで(コシ

BLを)自信をもって作れる」と答えたと、記事は伝えている。

その生産者たちの耳に、ぜひマーケットの声を聞かせたい。関東地区のコメのバイヤーが下したコシBLに対する驚愕の予想だ。県が配布したコシBLの説明文を見ながら、バイヤー氏は語った。

「交配相手がササニシキ、トドロキワセ、新潟早生などでは、食味は落ちることはあっても上がることはないね。粒も従来コシより小さ目だ。コメの検査員が『これはコシでないな』とはねつけたこともあったと言うよ。値段かね? 従来コシより高くなることは100%ないと断言しておくよ。悪いところ1500円落ち。よくて500円落ち。交配相手の値段に引つ張られるだろうな」

その生産者たちに、「そんな値段でもコシBLを作りますか」と聞いてみたい。

技術的にもフライング ささるまんの轍の恐れ

コシBLへの切り替え大作戦を急ぐ新潟県と全農新潟県本部の焦りは相当だ。県が県内の農業関係者に配布したQ&A形式の説明資料は、内容に大きな問題がある。宮城県「ささるまん」(品種ササニシキBLの商品名)についての記述だ。

2 耕作放棄地を プロ農家へ

戦後農政の大失敗は、農地権益に寄生する零細農をやたら温存し、その連中を束ねる農業団体に各種権益を保証し、政治家がこの連中に補助金をばらまいて集票基盤にしてきたこと。その一部はヤミ献金で還流させてきた。それを見て見ぬふりをしていた官僚組織も、失敗の片棒を担いでいた。

2月11日付け毎日新聞は、「食料・農業・農村基本計画」に、「長期間使われていない耕作放棄地の活用策を盛り込む方針」と報じた。「プロ農家」(担い手)への農地集積を目的とした農地改革の一環で、耕作放棄地に知事が半強制的に賃借権を設定し、市町村などを通じて担い手に貸し出す」と解説した。農水省は来年度の制度実施に向け、来週中にも関連法令の改正案を国会に提出する。

農地は立派な私有財産である。この問題を論じた食料・農業・農村政策審議会(農水相の諮問機関)の企画部会では「私有財産権を保障した憲法に抵触する可能性もある」という声も出たが、「農地の公共利用が目的で、抵触しない」と判断した。

農家の高齢化を背景に、耕作放棄地は近年全国的に急増。中には産業廃棄物が投棄されるなどの問題も多発。同紙は「現状では、農業委員会の再耕作指導に応じない農地所有者がいても、公的機関の農地合理化法人と売買協議を行うよう市町村長が通知する程度の対応しかできない」「新制度では、売買協議が不調に終わった場合、都道府県知事が耕作放棄地を市町村や合理化法人、特定農業法人に売却するよう調停できるようにする。さらに、調停も不調に終われば、知事が賃借権を設定し、市町村などに貸し付けることができる」と解説。

権益に寄生する偽農民追放は大賛成だ。

辛 上門

県と全農県本部
のコシBL導入は
技術的に見てもフ
ライングだ。県の
説明では、いもち

ささろまん導入は大失敗に終わり、今や忘れられようとしている品種である。ピーク時（1997年）には全作付面積の6%（5445ヘクタール）に達したが、最近はその10分の1ほどに減ってしまった。

新潟県の資料には、「2本立て販売や特殊米としての販売価格の向上を狙ったため作付面積は減少しましたが、BL化のため作付面積が減少したのではありません」との記述がある。宮城県産業経済部の担当者にこの点をたずねてみた。

「市場になぜ受け入れてもらえなかったかにはいくつかの理由がありますが、所詮、食味が悪ければいもちに強く安全だとPRしてみても消費者は魅力を感じなかったのではうね。そのことを新潟県さんはわかっておられるのでしょうか。先にBLに取り組んだ立場から一言忠告させていただけると、コシBLの一斉更新はかなりリスクの高い賭けという印象を受けます。10年以上かけて取り組んでも品種的にはまだ安定しません。新潟県にはどうか前車の轍を踏まぬようお祈りしております」

病抵抗性のある他品種との交配で従来コシに抵抗性遺伝子を取り込むが、最初に他品種と1回交配させ、抵抗性がついた稲に従来コシを5回交配させる連続戻し交配という手法を使ったと言う。コシBLの戻し交配は、同課の渡辺信夫課長によれば、おおむね5回ほどということである。

育種に詳しい農学博士（育種学）の知人に聞くと、「5回ほどというのはかなり教科書的です。理論値では、5回程度だと従来コシとの遺伝子の同一性は96・7%という計算になります。100%に近づけるには10回程度という見方もありますが、実際はそれでも問題は起きてきます。もう少し育種に時間をかけてみてもよかったです」と言う。

ささろまんの場合も、現場では「ササニシキと比べて、背の高さにはばらつきが出たり、開花時期が一部ずれたりする」などの苦情が上がっていたという。それどころか、新たなタイプのいもち病が出てきてBLが万全ではないとの意見もある。

真の狙いは種モミ独占か 県下農家の沈黙は不思議

春の田植えシーズンが近づいてくるとコシBLの綻びはあちこちで出てくるだろう。そんな中、県や全農

県本部の無謀ぶりを県内の商人系集荷業者は冷ややかに見ている。

「何のためにリスクの高いコシBLに全面切り替えするのか、県や全農県本部の意図がよくつかめない。コシBLの種モミの一手独占を企む県と全農県本部の野望ではないかな。それが証拠に、最初コシBLは新潟県種子協会を通じて農協ルートのみで扱われる方針を打ち出していた。商系業者がそれにクレームを付けると、急遽商人系ルートにも出すことにした。でも種子協会が独占することには変わりない。しかも種モミは毎年更新しなければならぬ」

新潟県種子協会は、会長が県農協中央会長、県の普及センター職員が天下っている。この団体にコシBLの種子を一手独占させる魂胆はここにあるようだ。

県や全農県本部の無謀な一斉導入に、県下の農業関係者が沈黙している。これは実に驚きだ。ごく少数の者は「県のお手並み拝見」と模様眺めのスタンス。

だがライバル産地が「純正コシ」を看板に攻めてきたらどうするのだろうか。それでも新潟コシは安泰と思っているのだろうか。

コシBLへの一斉切り替えを強行する新潟県や全農県本部の独善、おごり、傲慢、ここに極まれりである。

3 輸入黒豚偽装問題で 全農離れも必死か

もはやこの組織には、農水省もほとほと愛想が尽きたかのようだ。全国農業協同組合連合会、全農のことである。

この発端は、「全国農業協同組合連合会の子会社・組合貿易が仕入れた輸入黒豚が鹿屋市の業者によって鹿児島産に偽装されていた問題で、農水省は25日、新たに全農自らが1999年度以降、都内の商社から米国産黒豚肉を仕入れて販売していたことを明らかにした。全農も同日、同省に提出した業務改善報告でその事実を認めた。同省は国内農業の振興を目的とした農協法の趣旨に沿わないとして、全農に対し輸入事業の在り方を見直すよう異例の指示をした」（南日本新聞1月26日）ことだった。

新聞が伝えぬ楽屋話を一つ。問題が発覚した時、全農は「あれは子会社やったこと」と逃げた。それを聞いた島村宜伸農水相はカンカンに怒った。だが、それが全農に伝わっても、田林聡理事長は「国産から輸入品までの取引先の品ぞろえの要請にたいえ、国産畜産物の販売を補完するため、輸入自体に問題はない」（同紙）と聞き直った。全農にすれば農水相や農水官僚など何も怖くないといった態度のようである。

島村農相は同日の閣議後の記者会見で「不祥事が重なる組織が壊れかねない」と全農の体質を批判した。とにかく全農の不祥事はすさまじい。BSE騒動が起きた2001年以降、農水省から業務改善命令が出されるのは今回で6度目のことだ。

今回の不始末はそう簡単に收拾が着きそうにない。やがて春から夏にかけて理事会や総代会が控えている。全農幹部は針のむしろに座らされるが、一番厄介なのは農協や経済連の「全農離れ」である。